慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケンブリッジ・パラダイムの批判的継承の可能性に関する一考察(二・完) : パラドックスの連鎖を手掛かりとして
Sub Title	A dialogic critique of the cambridge school methodology (2)
Author	堤林, 剣(Tsutsumibayashi, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2000
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.73, No.3 (2000. 3) ,p.33- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20000328-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ケンブリッジ・パラダイムの批判的継承の可能性に関する一考察（二・完）

――パラドックスの連鎖を手掛かりとして

堤　林　剣

第七章　ダンによる軌道修正と新たな方法論的可能性の模索
第一節　ロックの政治思想の今日的有意性をめぐって
第二節　ダンによる新たな方法論的主張
一　今日の政治思想（史）研究に対するタンの危機意識
二　政治思想史研究における課題と方法論の類型
第八章　丸山眞男の思想史方法論
第一節　「思想史」と「思想論」の区別――アンビヴァレンスと「意図せざる結果」の重視
第二節　思想のレヴェル化
第九章　パラドックスの連鎖に着目する思想史方法論の模索
第一節　「フィクション」の政治的作用をめぐって――政治思想史研究の一課題
第二節　「フィクション」と現実観の解釈学的循環――均衡と変遷
第三節　パラトックスの連鎖に焦点を当てる思想史方法論の可能性について

第七章　ダンによる軌道修正と新たな方法論的可能性の模索

第一節　ロックの政治思想の今日的有意性をめぐって

かつてジョン・ダンはその著書『ジョン・ロックの政治思想』の序文の中で、ロックの政治理論から、現代政治理論にとって有効な分析視角を析出することはおよそ不可能であると断言した。[1] しかしながら二十一年後に、彼は、論文「ジョン・ロックの政治思想において何が今日的有意性を有し、何がそれを有さないか」において、この主張をほぼ全面的に撤回する。その中で彼は、以前の発言を「愚かな」「誤り」であると自己批判し、異なる方法論的立場に立って、ロックの政治思想の今日的有意性を明らかにしようと試みている。[2] 同論文において、ダンは、とりわけロックの信頼・信託（trust）に関する洞察が、現代政治を考える上で、重要な示唆を与えうると述べる。

とはいえ、このように痛烈な自己批判を行う一方で、ダンが初期のアプローチの有益性をすべて否定したわけではないことにも留意すべきである。それどころか、彼は、依然としてロックの思想を歴史的に（ミクロコスモスとして）再構成することの積極的意義について語り、また「合理的再構成」の無自覚的適用を非難しているのである。ただし、ダンは、そのような従来のアプローチは、第一ステップとして不可欠かつ有用であっても、そこにとどまってはいけないと考えるようになったわけであり、その意味で新たな方法論的可能性を模索しているといえよう。

ところで、ダンの近年の方法論的立場について検討する前に、ダンの初期の方法論において中心的位置を占め

ていたもう一つの（右のアプローチと表裏一体関係にある）論点について再度確認しておくべきであろう。というのも、この論点は、右の論文では必ずしも明示的に主張されていないものの、ダンがその重要性を否定するに至ったとは考えられない論点だからである。（事実、一九八四年に公刊された著書『ジョン・ロック』においては、この論点がまさに中心的課題として論じられている。[3]）それは、思想・思索を「苦悩に満ちた人間的活動」とみなし、その思想家の精神の軌跡を深く辿る、そして思想家の知的葛藤、時にはその挫折や失敗の（思想的）意味に着目し、そこから政治・社会・人間について学ぼうとする方法論的視座である。確かに、これはすべての思想史研究に適したアプローチではないかもしれない。また政治思想以外の分野（例えば文学）でもしばしば用いられる手法である。その意味で、半澤孝麿の指摘にもあったように、右のアプローチを採用した場合、政治思想と非政治思想の区別がある程度曖昧になることも避けられない。しかし、ここでとりわけ強調したいのは、このようなアプローチが、現代政治の諸問題に対する解決策を直接的に示唆するという意味での今日的有意性を持たないにしても、別の意味で今日的有意性と普遍的妥当性を有すると考えられるということである。これはダン自身が想定する以上にそうであるといえなくもない。というのも、西洋政治思想が特定の地域と特定の時代の産物であるにしても、その中には、そのような（文化的）特殊性を超えて、より普遍的な広がりをもって人間の精神に訴えるものがあるからである。それは、例えば、日本でのロック研究が、単なる舶来趣味としてではなく、切実な「政治と人間」の問題への対応という観点から捉え直されていることからも明らかである。加藤節の『ジョン・ロックの思想世界』の中の次の言葉はこのことをもっとも力強く表明している。

もとより、ロックが解こうとした問題は、ロック自身の問題であり、ロックが生きた時代の問題であった。その点で、ロックの思想が、我々を取り巻く現代の問題の解決に直接役立つことは、おそらくないであろう。……けれども、生き

るに値する人間の生の理念とその認識根拠とを求めて「思考への意志」を貫いたロックの知的苦闘は、時代や文化やナショナリティの相違を越えて、なお我々に迫るある普遍的なものをもっている。それは人間の運命の人間による打開、人間の問題の人間による解決にとって、問題を徹底的に考え抜く知的な勇気や誠実さがいかに強く要請されるかをいわば極限的に示しているからであって、歴史的実存としてのロックに今日汲むべき切実なものがあるとすれば、そうした強靱な思考態度こそがそれであると言ってよい。(4)

おそらくダンはこのような見方を否定的には捉えないであろう。いずれにせよ、ダンの新たな方法論的模索は、あくまでも初期の方法論を継承する形で行われていることが、まずは確認されるべきである。ただし、ダンがすこぶる大胆な仕方で、かつてのアプローチとは著しく異なる方向性を求めていることも事実である。『政治理論史』（*The History of Political Theory and Other Essays*）の序論において、彼は、三十年前の論文「思想史のアイデンティティ」などで主張した初期の方法論の有意性を再確認しながらも、そこにおける認識が不充分なものであったことを認める。(5) そして、このような自己批判を通じて、彼はより直接的な形で政治思想史研究が現代政治の問題の理解と解決に寄与する道を探究する。以下、その試みについて検討するが、ダンがこのような軌道修正ないし方向転換を行った背景には、今日の政治思想史、政治理論、哲学の研究状況に対する彼の危機意識が存在することが指摘されよう。

第二節　ダンによる新たな方法論的主張

一　今日の政治思想（史）研究に対するダンの危機意識

ダンが今日の政治思想（史）の研究状況に対して抱く危機意識は、『政治理論史』の序論においてもっとも強

烈に表明される。彼は冒頭で、われわれが今日いかに政治に対して貧弱な理解しか有していないかを訴える。しかも、そのことによってわれわれはただ単に現実の悲惨さへの理解を妨げられているだけでなく、さらには、既に深刻な危機的事態をより悪化させることになりかねないと警鐘を鳴らす。しかし、ダンが唱えるのは単なるペシミズムではない。というのも、研究や教育の仕方によっては依然としてプラトン・アリストテレス以来の西洋政治思想の古典および伝統から学ぶべきことが多くあるからである。すなわち、一見「古めかしい知的遺産」から、われわれは現代の政治的経験の意味について理解したり判断したりするための手立てを得られるだけでなく、場合によっては、より望ましい政治的未来を実現するための手段を獲得することもできるとダンは考えるのである。こうした彼の発言からは、政治思想史研究の今日的状況に対する危機感と同時に、政治思想史研究自体に対する並ならぬ期待が窺えるのである。(6)

しかし、今日の代表的な政治理論家に対するダンの評価は非常に厳しい。とくに彼のロールズ批判は辛辣極まりない。『政治理論史』において、彼は、ロールズの正義論が学界においては絶大な影響力を誇っているにもかかわらず、それが現実の政治に対しては憂鬱なほど微々たる影響しか及ぼしていないという。しかもそれは北アメリカにおいてさえそうであると。しかるに、このような事態をわれわれは深刻に受けとめ、そのずれないしギャップの意味を真剣に考えなければならないとダンは訴える。(7)

とくに、ロールズの社会契約論が終始配分的正義にこだわるのに対して、十七世紀の社会契約論（ホッブスとロックのそれ）は政治的義務の問題を主として扱ったことをダンは強調する。そして、このような政治的義務の問題を中心的に扱わない現代の政治思想（史）研究は致命的な欠陥を有するという。もちろん、ダンは配分的正義の問題を決して軽視するわけではないが、しかし政治的義務の問題をほとんど無視した形でその問題が追求さ

れる場合、そこから生じるのは単なるユートピア的企てにすぎないのである。しかも、ロールズは配分的正義の分析においてすら失敗していると、ダンの批判はとどまるところを知らない。(8)

また、ロールズを筆頭とする現代の自由主義思想家の大半に向けられた批判として、右の問題とも関連した論点であるが、ダンは彼らが政治理論と道徳理論との乖離を促し、もはや前者の本質を見失い、後者の問題しか扱わなくなったと診断を下している。すなわち、十七世紀の社会契約論者とは対照的に、彼らは、政治的支配をめぐる闘争に由来する残忍性から目をそむけるがゆえに、現実の政治や経済の情勢の黙殺に陥っている、ないしはそのような情勢に立ち向かう勇気を失ってしまっているという。その帰結として、本来なら現実政治の世界においていかに道徳的目的を達成することができるかという問いが設定されるべきなのに、実際は、政治のデモーニッシュな性格を忘却した形で、理想的な道徳理論だけが不毛に論じられることになってしまう。ダンのこのような主張の背景には、西洋社会において現在比較的安定した政治状況が実現されているからといって、それを当たり前のものとして受け取ってはならない、けだし政治とはちょっとしたきっかけで悲惨な暴力的状況を招来しうるものである、という危機意識が常に介在している。(9) 彼は不思議なほど「平和ボケ」していない。これはまた、ある意味では政治思想の復権を求める主張ともいえよう。

ダンの以上のような批判は、政治思想（史）研究の今日的有意性について真剣に考える場合、無視しえないものである。しかし、ダンのロールズ批判がいささか行き過ぎであるのも否めない。確かに、ロールズの正義論の学界における絶大な影響力とその現実政治に対する僅かな作用とのギャップにフラストレーションを募らせるのは理解できなくもない。しかし、ロールズの正義論は、その抽象的様相にもかかわらず、少なくとも北アメリカにおいてはある程度リアリティを帯びていることも事実である。また、ロールズ的自由主義思想に向けられた批

判（例えば、アトミスティックであるという批判）も、ヨーロッパの文脈では的外れの感があるが（というのも、シーデントップが指摘しているように、ヨーロッパ、とくに大陸においては、アトミスティックな自由主義理論はむしろ例外であるから）[10]、北アメリカではやはりある程度のリアリティを有する。そうでなければ、ロールズの正義論をめぐる論争が三十年近くも続いたりはしないだろう。

いずれにせよ、ダンが、米欧を問わず、政治思想（史）研究の今日的状況に対して危機感を抱いていることは確かであり、そのような彼が具体的にどのような新たな方向性を指示しているのかを検討することは無意味ではない。

二　政治思想史研究における課題と方法論の類型

ダンは、今日の大学における政治学教育においてプラトンやアリストテレス以来の政治思想を扱うこと自体には重要な意義を認めている。事実、ダンはそれがある種の正統性を有するだけでなく、さらには今日の政治的経験に対するわれわれの判断力を醸成するためにも不可欠であるという[11]。もちろん、それらは無謬の聖典でも普遍的な文化的権威を保証するものでもないとダンは断わり、ゆえに西洋政治思想の伝統に対して批判的にアプローチする必要性も説く。ただし、そのような伝統に代るものが非西洋において今のところ存在しないことも彼は指摘する。

すなわち、ダンは一方で現今の政治思想史研究に対してはすこぶる批判的であるが、他方で政治思想を研究することの意義それ自体は絶えず強調してやまないのである。それでは、ダン自身はどのような政治思想研究を意義深いものと考えるのかを以下『政治理論史』の中で展開される議論に即してみてみよう。

まず最初にダンは、政治思想史研究を遂行するにあたって、三つの異なる問いに答える必要性を説く。第一に、政治思想史の研究対象は何であるか。第二に、政治思想史はいかなる方法論を用いて研究されるべきか。そして、第三に、そのような政治思想史研究が一体いかなる今日的有意性を有するのか。これらの三つの問いに対する答えは当然ながら密接に関連している。(12)

次に彼は、右の問いの関連性を念頭に置きながら、政治思想史の方法論の問題に焦点を当てる。そこでは、三つの異なる方法論的アプローチが紹介される。(13) 第一のアプローチが、ケンブリッジ・パラダイムである。ダンはスキナーの方法論に言及しながら、そこでは著者の意図の再現が主たる目的となるという。第二に、マクファーソンに代表されるような方法論が紹介される。このアプローチにおいては、テクストの歴史的性格が重視されるものの、著者の意図はさほど関心の対象とはならない。むしろ、特定のテクストが執筆された時代背景に注目が注がれる。したがって、ホッブスやロックが、当人が自覚していなかったにもかかわらず、資本主義社会の理論的基礎を準備したといったような議論がでてくる。(14) 第三のアプローチは、テクストの歴史的性格にほとんどまったく関心を示さず、テクストを現代の読者が知的刺激を得るための単なる「知識の宝庫」とみなす立場である。ここではコンテクストに一切拘束されないような自由な解釈が容認される。以上の三つの異なるアプローチに関して、ダンはそれらが相互に矛盾するものでなく、各々が異なった側面に光をあてるものであるという。ただ、この箇所ではとくに言及はないが、ダンはいずれのアプローチもそれが自覚的に追求されていることをその相互容認の前提とするであろう。すなわち、スキナーと同様に、無自覚的な神話創造に対してはダンも批判的な態度をとるであろう。ともあれ、ダンがこのように他の方法論の有意性を積極的に認めたことは、ダンやスキナーの初期の方法論的主張に鑑みるに、興味深い方向転換が行われたことを意味している。

右の議論につづいて、ダンはさらに、政治思想史の理解にとって重要と思われる四つの問いを提示する。そのうち二つの問いは、右の方法論的類型と重複している。すなわち、第一は、著者のテクストの意図を問うものであり、第二はテクストがあらわれたその時代背景にフォーカスを当てるものである。後者のアプローチはテクストを通じてその歴史的コンテクスト（政治社会の特徴など）を知ろうとする立場であり、しばしばマルクス主義研究者によって採用されたものでもあるとダンはいう（マクファーソン、ヒル、ゴールドマンなどの名があげられる）。ただし、このアプローチは政治思想の歴史を研究対象にしているにもかかわらず、その成果はさほどその歴史の理解に寄与していないと彼はいう。

第三の問いとは、テクストが著者以外の人々（同時代人および後代の人々）によってどのように理解されたか、を問うものである。偉大なテクストはしばしば著者の意図から独立した形で独自の運命を辿り、またその解釈のされ方はアイロニーに満ちている。そして、このような偉大なテクストの運命について研究する意義をダンは積極的に認める。ただし、このような研究は想像を絶するほど過酷な知的作業を要求するとも述べる。事実、偉大なテクストの歴史的運命の解明に本格的に取り組んだ研究がほとんど存在しないのは、そのようなアプローチの難しさを端的に示している。したがって、右の諸ジャンルの中で、これこそが思想史研究者にとって「もっとも畏怖すべき」(most intimidating) ジャンルであるとダンは考えるのである。[15]

第四の問いは、政治思想の今日的有意性の問題をより直接的に問うものである。その意味で他の三つの問いとは根本的にその性質が異なるとされるが、これがいかに不可欠かつ重要な問いであるかをダンは力説する。第四の問いとは次のようなものである。「政治思想の偉大なテクストは、今日、われわれにとっていかなる意味を有するのか。」「また、将来において、後世にとって何を意味するのか。」この問いは避けて通れないものであると

ダンは強調する。この問いに対して何らかの答えが提示できないのであれば、他の問いもその切実さを失うとまで彼はいい切る。[16]

それでは、ダン自身がこの最後の問いに対してどのような解答を提示しているのかをみてみよう。まずは、今日の政治的経験に対するわれわれの判断力を醸成し、より先鋭化するという点が指摘される。これが具体的にどのようにして可能になるか、ダンの説明は必ずしも充分とはいえないが、方向性としては、（古典的）テクストに含まれる洞察を手掛かりに、政治的義務の問題を中心に据えながら政治理論と道徳理論とを接合し、その枠組みの中で信頼・信託（trust）の政治学および慎慮（prudence）の政治学の確立を目指すことが求められる。[17]

また、政治思想史研究は、全般的な政治目標を明確化したり評価したり、あるいは政治的行為の社会的作用・意味を評価するのに有効であると彼はいう。[18] この問題に関しても、具体的な方法や手段が論じられるわけではない。ただし、政治思想史研究は、一方で政治的現実や支配的信条の無批判的な受容がしばしば弱者を虐げるような権力構造ないし抑圧体系の無意識的な容認・再生産に寄与しているということを、いかにそれが痛みをともなうものであれ人々に知らしめる役割を果たさねばならないとされる。いわゆる「鎮痛剤」の服用を拒否し、あくまでも不断の（自己）批判を通じて苦悩を経験し続けることは知的、道徳的、政治的健全さを意味し、したがって、政治思想の永続的な役割は、そのような苦痛を鈍化させないことに求めねばならない。このことは、学問としての哲学がもはやそのような責任を放棄した今日、なお一層緊要さを増すとさえいえよう。[19] こうした主張は、具体性に欠けると批判される余地はあるが、ダンがここで第一義的に要求しているのは、具体的な政治理論の体系や方法論以前に、それらをささえる批判精神なのである。

しかし、ダンが具体的な議論をまったく展開しないわけではない。例えば、政治思想史の研究を通じて、われ

われは現代の政治的イデオロギーのより深く知的な理解と、イデオロギーに働きかけるためのより戦略的な手立てを得ることができる。主としてイデオロギーを構成する概念的諸要因の同定から、また、イデオロギーの基調をなす知的および情緒的（心理的）作用の解明からそれが可能になる。そしてコンテクストの変化に伴うイデオロギーの変遷過程を辿ることにより、現代社会の特徴が浮き彫りになると彼は主張しているが、これはさらに思想史方法論の新たな可能性という次元でも論じられる。すなわち、近代国家、民主主義、人権といった今日世界的に受け入れられている政治的概念の起源と変遷過程、連続性および非連続性などに着目するような概念史の有意性がそれである。その際、ダンはケンブリッジ・パラダイムとラインハルト・コゼレック主導のドイツの『概念史辞典』（*Geschichtliche Grundbegriffe*）のアプローチとの有意的統合を示唆する。[20]（また、倫理学の領域における概念史的アプローチの成果として、英米のアラスデア・マッキンタイヤー、チャールズ・テイラー、バーナード・ウィリアムズなどによる研究業績を彼は評価している。）[21] このような主張はダンのみによってなされているわけではない。例えば、メルヴィン・リクターもその著書『政治概念と社会概念の歴史』の中でケンブリッジ・パラダイム（主にスキナーとポーコックの方法論を指している）とドイツの「概念史」（*Begriffsgeschichte*）研究（とくに『概念史事典』および『必携』のアプローチ）との統合の可能性と有意性を訴えている。[22] ただし、ダンもリクターも右のような可能性に言及するにとどまり、具体的にどのように両アプローチが統合されうるかについてはほとんど説明していない。ダンは、今までの概念史研究において政治的概念が稀にしか扱われてこなかったことを考えれば、未開拓同然であるこの分野は膨大な知的作業を要求するが、それだけに見返りも大きいと考える。そのような先駆的研究として、ダンはボールの業績を評価する。[23]

最後に、ダンは、政治思想史の研究および教育が、ある程度政治的行為としての性格を備えていることを指摘

する。[24] この問題は既に本論文前編のスキナー批判の箇所でも扱ったが、[25] ダンもそこにおける主張におそらく同調するであろう。もちろん、西洋において西洋人研究者が西洋政治思想史を精緻な歴史研究とし遂行する場合、いかにそれが好古趣味にみえようとも、それは究極的には自文化の歴史的起源や特質などを明らかにするという意味で自己認識につながるし、一定のリアリティに裏づけられている。にもかかわらず、そのような研究がややもすれば政治的現実から乖離してしまう危険性をダンは常に警告するわけであり、だからこそ政治思想史研究の政治的行為としての側面をあえて強調するのである。

興味深いことに、そのような立場に立つダンは、日本における政治思想史研究を高く評価する。例えば、『政治理論史』においても、日本の学問的水準を称賛する箇所があるが、[26] 彼が念頭においているのは、主として丸山眞男と福田歓一の研究業績である。これは両者の研究が、厳密な学問的操作を通じながらも、常に切実な現実政治の問題意識に支えられている上、例えば日本における民主政治の確立といった課題と結びついているという意味で極めて実践的な（社会改革を推し進めるような）研究であるからではないだろうか。[27]

以上、ダンの近年の方法論的立場についてみてきたわけだが、そこには今日の政治思想史研究の問題点を暴き出し、思想史研究の新たな方向性を示唆するという意味で有意な観点が含まれている。にもかかわらず、ダンの議論は依然として具体性に欠けると指摘することも可能である。さまざまな政治思想史研究の課題や方法論的類型が列挙されることによって、危機意識や問題の複雑性と切実性に対する認識が呼び起こされるわけだが、ここから先に具体的にどう進むべきかはわれわれの課題として残されている。そこで、さらなるヒントを得るために、次に丸山の思想史方法論について検討することにしよう。

第八章　丸山眞男の思想史方法論

第一節　「思想史」と「思想論」の区別――アンビヴァレンスと「意図せざる結果」の重視

注目すべきことに丸山眞男は、一九六一年の時点で（すなわち、スキナーが一連の方法論論文を発表する以前に）スキナーの「神話」批判に類似した主張を行っている。例えば、思想史研究者が自らの現代的問題関心を無自覚的に過去の思想に投影するようなケースを批判し、そのような場合、しばしば思想家の評価について「彼はここまでいったけれどもここで止まってしまった、そこに限界がある、こういう評価になりやすい」という。[28] あるいは、右のようなアプローチを採用した場合、「アリストテレスは偉かったけれども量子力学を知らなかった点に限界があった……これは笑い話ですけれども、そういう論法になりかねない」とユーモアをたっぷりこめて、その方法論的誤謬を指摘する。これはスキナーの「教義の神話」批判に似ている（もっとも、丸山の場合はその方法論の哲学的基礎を言語行為論に求めていないという点で、スキナーとは決定的に異なるが）。丸山自身は「思想史というものは問題史としてしかありえない」[29] とみるわけだが、この立場によると、固有のコンテクストにおいて生起する固有の問題に対して否定あるいは肯定、修正あるいは付加という形で解答が要求されるようなプロセスを通じて思想の歴史が展開する。したがって、以下のような主張がでてくる。

その時の状況においてまだ出現していない問題に対して解答をしていないのは当たり前であります。その時にどういう問題があったか、またなかったか、そしてその問題にはその当時に同時代人がどれだけの幅で、どれだけの深さで答えていたか、が問題なのであって、そういう歴史的文脈のなかで比較してはじめて、ある思想家の相対的な「独創性」とか、あるいは相対的なマイナス面とかを論ずることができます。ですから現在到達した成果を基準にして過去を裁く、

あるいは現在のイメージにもとづいた価値基準を過去にちりばめる、ということでは、思想史から実り豊かな結果を期待することは困難だと私は思います。[30]

以上の丸山の主張が時間的にスキナーの方法論論文の発表に先行してなされたことは既に触れたとおりであるが、さらに特筆すべきことは、丸山もスキナーと同じようにR・G・コリングウッドの影響を受けた可能性があるということである。間宮陽介が近著『丸山眞男』の中で指摘しているように、丸山の著作や座談にはコリングウッドに言及する箇所がいくつかあり、カーメン・ブラッカーが一九五〇年代の初めにコリングウッドの『自然の観念』を丸山に送ったところ、とても感謝されたという逸話も存在する。[31]「一般的な思考というものは存在せず、思考とはつねに特定のなにかについての思考である」という「コリングウッドの命題は、とりわけ丸山眞男の思想をよくいい表している」と間宮は述べている。[32]

丸山は思想史の研究においては、以上のような方法論的立場を主張するわけだが、だからといって歴史的コンテクストを離れて思想を論ずるような研究を否定しているわけではないことも留意すべきである。丸山は、「過去のいろいろな歴史的な遺産を単純に素材として扱い、その歴史的な文脈をまったく抜かして、主観的な関心に従って自由に操作する」ようなアプローチを「思想論」と称し、それを「思想史」と対峙させるわけだが、他方で彼は思想論について、「それはそれで十分に意味があり、存在理由があります」と述べている。[33]つまり、丸山は、思想史と思想論とが相矛盾するものであるとは考えず、それぞれの価値を認めるわけだが、しかし両者が混同されることに対しては異議を唱えるのである。思想史にせよ思想論にせよ、それは一定の方法論的自覚のもとに遂行されねばならない。[34]前編でみたように、これはスキナーが軌道修正を行った後に到達した立場でもある（「歴史的再構成」と「合理的再構成」との区別が、「思想史」と「思想論」との区別に対応しているといえなくもない）。

以上、丸山の方法論とスキナーのそれとの類似点がある程度明らかになったわけであるが、両者の間には相違点が多くあるのも事実である。スキナーと違って丸山が言語行為論にその方法論の哲学的基礎を求めないという点は既に述べたが、この違いは両者の方法論的射程の違いとしてもあらわれる。丸山もテクストの意図の再現を重視するという意味で、スキナーと出発点を共有するわけだが、しかし丸山にとってそれはあくまでも出発点であり、そこから先の問題がむしろ中心的に論じられる。すなわち、丸山は個々の思想がさらにはより大きな思想的潮流の中でどのように関連したか、あるいは関連しえたか、また、個別の思想ならびに思想的潮流がどのような社会的作用を及ぼしたか、あるいは及ぼしえたか、の解明を求める。

すなわち、丸山は、とくに思想が創造される過程における「アンビヴァレントなもの、つまりどっちにいくかわからない可能性」に着目する必要性を説く。というのも、逆に到達した結果ないし地点からある種の必然的な因果関連を想定して思想を判断する場合、過去の時点における多様な可能性が否定され、「勝てば官軍」的な論理のうちに、思想の奥行きが失われてしまうからである。[35] 直線的な進歩観を拒否し、アンビヴァレンスを明らかにするような方法論的立場を確立するにあたって、丸山は、マンハイムの遠近法的な「ペルスペクティヴィスムス」（Perspektivismus）という認識方法を採用した。これによって「精神史を社会史の文脈の中におきながら同時に、精神史特有の発展形態を明らかにする」ことが可能になると丸山は考えるわけだが、具体的にはこれは次のような視座を意味する。

精神史特有の発展形態の一つとして、先行する思惟様式や体系からの継承が、いわゆる加算的綜合（additive Synthese）として単線上で起こらないで、問題設定の移動――思惟を組織化・体系化する際の中心点の変動として起

る、ということがあります。ですから、過去の思想は後続する思想によって「のりこえ」られたり（こういう発想自体が単線上の継起を予想しています）、吸収され尽くすのではなくて、逆に「のりこえ」られた筈の思想が、歴史的変化とともに再評価されたり、「何々にかえれ」というような「復古」運動が精神史上にしばしば起るわけです。しかも、そうした問題設定の移動は、先行する思惟様式・諸範疇を継受しながら、その意味転換が行われるという二重の過程を伴ないます。同じ範疇が存続しながら、思考を組織化し体系化する（狭い意味の理論「体系」をいうのではありません）中心が異なるために、いわば「配置転換」が起って、遠近法的な位置づけが違ってくるわけです。[36]

これが思想の連続性と非連続性の統合的理解を可能にするアプローチでもあると丸山は考える。というのも、これによって「思想史における思惟範疇の内在的な連続性と、後続する思想における同じ範疇の意味転換（非連続性）」とを統一的に捉えることが可能になるからである。[37]

以上の見地に立って丸山はさらに思想史におけるアイロニーないしパラドックスの作用・現象に着目する。すなわち、丸山は思想家の意図だけでなく、その意図とは無関係にその思想がどのような歴史的運命を辿ったかについても同じくらい関心を向ける。またそうすることによって、マルクス主義的イデオロギー論がしばしば犯す発生論と本質論との混同を回避できると彼は考えるのである。丸山は次のようにいう。「一般に、ある制度なり、ある思想（たとえば自然法思想）なりが、一定の歴史的条件の下で、一定のイデオロギー的機能を果たすべく誕生したとしても、そうした〈道具〉が主人の意図に反して、〈目的の変生〉（……）を遂げたり、主人に向けられた逆の刃になる例は史上稀ではありません。むしろ思想史などはそうしたアイロニーに満ちています」。[38]

したがって丸山は、思想家の主観的意図と、思想の社会的作用から生じる「意図せざる結果」との間のずれに着目する手法を自らの思想史叙述にしばしば用いる。それがもっとも顕著にあらわれるのが例えば論文「超国家

主義の論理と心理」（一九四六年）である。米原謙が指摘するように、この分析視角はウェーバー的ともいえる。[39] 周知のとおり、ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、プロテスタンティズムの教理から生じる「論理的帰結」と「心理的帰結」との間のずれに着目することによって、プロテスタンティズムという宗教倫理が意図せざる結果として資本主義の精神の発生に寄与したパラドックスの過程を説明するわけだが、このような分析視角は丸山が採用したそれと類似している。ゆえに、米原は、丸山自身がウェーバーの影響をさほど受けていないと明言しているにもかかわらず、あえてその影響関係を主張するのである。[40] しかし、仮に米原の主張が正しいとしても、思想史方法論の構築に際して、丸山がもっとも自覚的に依拠したのはマンハイムの知識社会学である。マンハイムの「ペルスペクティヴィスムス」という認識方法を丸山が採用したことは既にみたとおりである。また、丸山が主張した思想のレヴェル化の考えについても、マンハイムの影響がみられる。

第二節　思想のレヴェル化

丸山は、マンハイムによるイデオロギーの諸レヴェル化――個人の思想、学説、個別科学、世界観、時代のさまざまな「主義」、集合意識、思考範型――からヒントを得て、思想を以下のような五つのレヴェルに区別している。（一）もっとも高度に抽象化された体系的な理論・学説・教義、（二）世界観・世界像・人生観、（三）意見・態度、（四）生活感情・生活ムード・実感（理性的な反省以前の生活感情）、（五）意識下の次元。このようにして丸山はまず思想を多層的なものとして捉える。[41]

そして、それぞれのレヴェルに適した分析視角があり、異なった種類の思想史叙述が可能になるという。例えば、教義史（history of doctrine）のアプローチでは、キリスト教の教義史、儒学史、マルクス主義のドクトリン

の発展史、政治学説史などといった高度に自覚化された抽象度の高い体系や教説の歴史的展開を追っていく。観念の歴史（history of ideas）では、進歩の観念といったような「ある文化圏に、また一時代もしくは数時代にわたって通用して来た観念を抜き出して、それが他の観念と結びついたり離れたりする過程、あるいはまた、社会過程のなかでのその観念の機能の仕方の変遷を追及する」[42]。さらには、時代精神や時代思潮などを扱うカテゴリーも考えられる。といった具合に、丸山は、思想史研究において、考察対象の多様性とともに、分析視角の多様性も認めるのである。しかも、それらのレヴェルの上下関係は、価値の上下関係とは無関係であるとされる。

しかし、丸山はこれらの諸レヴェルが無秩序に成立し、相互に関連性がないものだとは考えない。というのも彼は次のように主張するからである。「およそ思想というものにオリエンテーションを与える、つまり目標や方向性を与えるのは、相対的にこの成層〔思想の諸レヴェル〕において上のレヴェルにあるものです。つまり目的意識性、目的設定による方向性というものは、上から下に向かっていく。それに反して思想を推進していくようなエネルギーというものは、逆にこの層の下の方から発して上へと上昇していく」[43]。さらに丸山は、カントの有名な言葉をもじって次のようにいう。「生活感情とか実感とか、そういうものによって裏づけられないところの理論なり学説なり教義なりは〈空虚〉であり、逆に理論、学説、教義あるいは世界観というものによって方向づけられない実感は〈盲目〉である」[44]。

以上のように、思想をレヴェル化し、各々のレヴェルに適した分析視角を臨機応変に採用し、また同時に異なるレヴェルの思想を総合的に関連づけて捉えようとする方法論は示唆的であるといえよう。にもかかわらず、現実政治において高度に抽象的な理論や学説がしばしば空虚なものとして空回りし、非合理的なフィクションが強烈なエネルギーをもって作用する現象（例えば、ナショナリズム）を目の当たりにする時、われわれは、丸山の想

定する思想の諸レヴェル間の相互依存性が、一定の理想的目標として唱えられえても、現実の政治現象を理解するための手段としては一定の限界を有することを認めざるをえない。もちろん、丸山自身このような限界は百も承知であろう。現に丸山は「古層」論文の中で、非合理的な、しかし強力で永続的な作用を及ぼす「執拗低音」の分析を、以上とは異なったアプローチにもとづいて行っているわけであるから。(45)

次章では、丸山やダンやスキナーの議論の検討を通じて得たさまざまなヒントをもとに、思想史方法論に関する私のささやかな一試論を展開してみたいと思う。

第九章　パラドックスの連鎖に着目する思想史方法論の模索

第一節　「フィクション」の政治的作用をめぐって――政治思想史研究の一課題

政治思想史研究における今日的有意性の問題を方法論的観点から論じるにあたって、まずは思想の政治的作用に関する一仮説を提示することから始めたい。この仮説とは、政治空間における「フィクション」の作用の不可避性を想定するものである。それは以下のような前提の上に成り立つ。

ここでいう「フィクション」には二種類ある。作為的という意味でのフィクション、そして神話的という意味でのフィクションである。便宜上、この区別をさらに次のように定式化したい。作為的なフィクションとは近代精神と結びつくものであり、それはある種の合理的・世俗的・非神秘的な基礎を要求する。換言すれば、それは人間社会を自然的所与ではなく、人間の作為の産物とみなすような「作為の論理」に基礎づけられたものである。しかも、その場合、フィクションのフィクション性を常に自覚することにより、絶えず作為の精神が作用し、

「フィクションの自己目的化」の阻止をはかろうとする。[16] 丸山がいうように、「近代精神とは〈フィクション〉の価値と効用を信じ、これを不断に再生産する精神」である。[17]

右とは対照的に、神話的なフィクションとは擬似歴史的な物語を必要としても、合理的基礎や歴史的事実をその存立条件として要求しないものである。人種主義、英雄崇拝、神政政治、ナショナリズムなどを支える諸神話・教義・イデオロギーがその典型的な表現形態といえよう（もっとも、ナショナリズムに関しては、近代精神と連動したものもありうるが）。無論、神話にしてもそれは人間の作為の産物であるに違いないわけだが、しかし、それはしばしばそのようには自覚されていない、あるいは自覚されているとしても、それを合理的に再編成しようという意志・思考と連動していない。ちなみに、スキナーが批判するような学説上の神話は右の神話的なフィクションとは若干性格を異にするが、それは、その合理的装いにもかかわらず、歴史的根拠を有さないという意味において同系に属するといえなくもない。ただし、学説上の神話が「合理的再構成」という形で自覚的に創造されることをスキナーが条件付きで容認していることは既に述べたとおりである。

もちろん、以上のようなフィクションの区別を拒否し、ポスト・モダン的にすべてを「物語」として捉える立場もありうるであろう。しかし、この立場は、近代合理主義の非合理的側面や硬直化した近代思想（批判精神が形骸化した形態）が隠蔽ないし正当化する不正義や暴力を露呈するためには有効であっても、近代思想の建設的批判のためにはいささか不適切であるといえよう。というのも、両者の区別が同じカテゴリーの中で解消されることによって、皮肉にも、近代思想に固有な限界が見えなくなるからである。

しかし、仮にすべてのフィクションを物語と位置づけたとしても、そして何らかの物語が政治空間を不可避的に支配すると想定しても、否定しえない事実は、信憑性のある物語と信憑性のない物語が存在するということで

ある。したがって、われわれは、多くの人々のイマジネーションを強力に捉えるという意味で信憑性のある物語の、その信憑性の原因を突き止める必要があるであろう。そうすることによってのみ、実現可能な理想を体現するようなフィクションの構想が可能になると思われるからである。（これは政治思想史研究の極めて実践的な側面である。）そして、以上が政治思想史研究の正当な課題の一つとみなされるのであるならば、それがどのような分析視角で追求されるべきかが思想史方法論の問題となるであろう。そのような方法論は、過去から現在に至る歴史の潮流の中で、どのようなフィクションが、どのような形で、どのような理由で作用したかを解明するための手立てとなるべきであるが、その方法論の構築にあたって、丸山やダンやスキナーの方法論は重要な示唆を与えるであろう。

いうまでもなく、政治思想史研究のみによってフィクションの信憑性の原因・メカニズムを解明することはできない。フィクションの作用を理解するためには、しばしば一国内あるいは国家間における権力（配分）関係、社会経済構造、軍事情勢、文化的伝統、等々の多様な要因も考慮する必要がある。したがって、より正確な理解を得るためには、経済史、国際関係論、地域研究、文化人類学、社会学、心理学などといった諸学問分野と連携しながら研究が行われねばならないであろう。にもかかわらず、政治思想史の研究がとくに適していると思われる説明領域がある。それは例えば、次のような切実な政治問題について考察する場合、その有効性を発揮するであろう。

先に「作為的なフィクション」と「神話的なフィクション」という二種類のフィクションを想定したが、概して近代政治学は前者を前提として構築されているといえる。無論、政治現象に含まれる非合理的な要素も考察の対象となるわけだが、近代政治学はそのような非合理的なるものを合理的に説明できるという信念の上に成り立

っている。しかし、現実の政治空間は両フィクションの複雑な混合体によって支配されているがゆえに、その混合体の政治的作用を従来の合理的パラダイムで理解できないケースがしばしば生じる。いうまでもなく、西洋と非西洋ではその度合いは違うであろうし、西洋諸国間でも差があり、また一国内においてもグループ間で差があるであろう。にもかかわらず、多少なりとも次のような現象はどの国でもみられるのではないだろうか。それは、神話的なフィクションが作為的なフィクションに優先する形で制度化する現象である――「神話の制度化作用」（平澤孝麿）。これがもっとも典型的に現われるのがナショナリズムである。

ナショナリズムの現象が、容易には合理的な理論によって説明されないのは、例えばホブスボームやゲルナーといった著名なナショナリズム研究者の予測が度々重要な点において外れることからもわかる。[48] ナショナリズムが近代の「新しい構成物」であるがゆえに、それをささえる精神的エネルギーは根源的な永続力に欠けるといった主張、あるいはナショナリズムは産業化の初期の段階に顕著な現象であり、産業社会の成熟とともに衰退するであろうといった予測が、合理的な議論にもとづいてなされているにもかかわらず、見事に外れるのである。[49] あるいは、ナショナリズムが事実無根の神話に依拠していることが暴露され、その作為性と非合理性の自覚を促された後にも、依然してそれが強力に作用し続ける事実は多くの学者を困惑させる。さらには、ナショナリズムは、自己保存権といった極めてミニマルな前提から合理的に構築されるホッブス的な政治理論を裏切る。すなわち、自己保存が万人に共通する根源的欲求であり権利であるという前提から出発して、共同体の全成員の生命をもっとも効果的に保証することを目的とする合理的な政治理論も、国家のために喜んで命を捧げるような人々の存在によってその根底を揺るがされる。自己の生存が国家の生存に依拠しているといった合理的期待、あるいは国家の物理的強制装置に由来する恐怖を考慮した合理的計算などを遥かに超えた形で国家に対する自己犠牲が行われ

るからである。アンダーソンが指摘するように、「ネーションは愛を、それもしばしば心からの自己犠牲的な愛を呼び起こす」わけであるが、当然このような愛を合理的な理論的枠組の中に位置づけることは容易ではない。[50]

このように非合理的なるものを合理的に説明しようとする従来のアプローチが一定の限界を有することは否めないであろう。しかし、だからといって合理的理解そのものを放棄するわけにはいかない。合理的理解を断念することは、学問的アプローチを断念することに等しいからである。しかるに、われわれは従来のアプローチの問題点を的確に把握した上で、異なった次元でそのアプローチを補完するような合理的パラダイムを模索するしかないであろう。しかも、そのパラダイムは、少なくとも次のような二つの問いを扱わなくてはならない。一つは、考察の対象となる非合理的な政治現象が合理的理解を容易に許さない理由は何か。いま一つは、なぜ「神話の制度化作用」がしばしば生じ、いかにしてそれが阻止されうるか、である。（もっとも、二番目の問いは、近代精神に対する一定のコミットメントを前提とした問いであるが。）以下において、そのようなパラダイムの構築が可能となるための前提条件について考えてみたいと思う。

第二節　「フィクション」と現実観の解釈学的循環――均衡と変遷

かつてデイヴィッド・ヒュームはその論文「政府の第一原理について」（一七四二年）の中で、ある不思議な政治現象に着目した。すなわち、常に多数者である被支配者側に実力があるにもかかわらず、その多数者がごく少数者によっていとも簡単に支配されているという驚異的な現象にである。そこからヒュームは次のような結論を導き出した。「政府の基礎は輿論（opinion）だけであり、この原則は、自由で人民的な政府にも、もっとも専制的で軍事的な政府にも当てはまる」[51]と。

この洞察は、フィクションの作用の仕方を理解するのに、重要な示唆を与える。というのも、これは社会における実力関係が、即そのままフィクションの内容に反映されるわけではないことを意味するからである。例えば、経済的不平等が顕著であり、およそ権利の平等といった概念が形骸化している状況においても、平等主義が強力なフィクションとして作用し続けることがある。あるいは、フュレがトクヴィルの理論に依拠しながら説明したように、フランス革命が旧体制との完全な断絶を意味したという考え、またフランス革命が階級闘争の必然的帰結であったというレトリックは、当時の政治的・経済的実体を反映していないにもかかわらず一世を風靡した。(52) より身近な例として、自由競争市場という強力なフィクションがあるが、これも実体に裏づけられているとは一概にいえない。要するに、リアリティとパーセプションが必ずしも対応していないのである。

となると、フィクションの作用およびその信憑性の原因を解明しようとする場合、ただ単に政治的・経済的実体を知るだけでは充分ではないことがわかる。したがって、われわれは別の方法でこの問題に接近しなければならない。ただし、フィクションと現実の政治・経済制度との関係が、そのフィクションが政治・経済的実体を反映しているか否かにかかわらず、信憑性の創造という次元で密接に関連しうることも留意すべきである。例えば、ソ連邦がマルクス主義の理念・理論を忠実に体現していたとはいいがたいにもかかわらず、ソ連邦の崩壊に伴ってマルクス主義の権威も失墜したという事実はこのことを端的に示している。逆にソ連邦が健在だった頃、マルクス主義思想は多くの人々のイマジネーションを強力に捉えた。これはフィクションやそれを構成するイデオロギー（学問さえも）がある種の権威体系――必ずしも合理的なものではない――に支えられていることを同時に意味する。

いずれにせよ、フィクションの作用を充分に理解するためには、実証研究などとは異なったアプローチも要求

されるわけだが、そのようなアプローチが可能となる前提として、ここではさらなる仮説を導入したい。それは、フィクションの信憑性が、実体ないし「客観的な現実」に依拠しているというよりは、むしろ個々人の主観的な現実観とそれにもとづいた予測・期待と結果との整合性に関係しているという仮説である。（もちろん、現実と現実観がまったく無関係に成立するわけではないが。）すなわち、人間は自らの現実観にもとづいて、ある一定の予測・期待のもとに、判断・行動する。そして、そのような判断・行動がもたらす結果（これも主観的に理解されるもの）が、その現実観とさほど矛盾しない場合に、その現実観が現実とみなされ、フィクションが再生産ないし維持される。（また、逆に支配的なフィクションが個々人の現実観の形成にある程度影響を与える――存在拘束性の問題。）これは個々人の現実観と社会の支配的なフィクションとが整合的であり、したがって両者の間にある種の均衡が保たれていることを意味する。このときフィクションは安定性を確保する。例えば、自由競争市場がある経済主体の現実観を構成する場合、その人はおそらく市場経済のルールに則って経済活動を遂行するであろう。そして、その経済活動の結果が予測可能な範囲内にとどまる限り、その現実観は保たれる。仮にその経済活動が失敗に終わったとしても、自由競争市場においては勝者も敗者も出るという前提があるわけだから、その失敗が予測された類の失敗であれば、現実観は依然として保持される。

ただし、ここで看過されてはならないのは、右のような均衡が社会のすべての成員によって同等に保たれているわけではないということである。自らの現実観と社会で支配的なフィクションとが整合している人々は、往々にしてそのフィクションから恩恵を蒙っている人々である。しかし、他方で、そのようなフィクションの支配によって虐げられている人々が存在するのも常である。そのような人々はしばしば社会的弱者であるがゆえに、支配的なフィクションに効果的に働きかける力を有さない。（ダンがいうように、政治思想史研究は、フィクションの

無批判的受容が招来する弱者に対する抑圧的作用を、われわれに痛みをもって知らしめなくてはならない。）したがって、自由競争市場が虚偽に満ちた不正義なシステムであると考えるような弱者がいたとしても、その人の現実観は容易に社会で支配的なフィクションを変化させないであろう。

また、稀にではあるが、以上のような現実観とフィクションとの解釈学的循環では捉えられない現象が歴史の転換期にみられることも見逃されてはならない。それは、例えば宗教改革期や革命時において、およそ現実・現実観を無視した形で人々が信念・理想を追求するような場合である。確かに、このような場合においてすら、非世俗的・超現実的な信念・理想が当人の現実観を構成していると解釈することも不可能ではない。しかし現実社会を支える一見不動な権威に抗する形で、「我ここに立つ」といった内的確信のもとに判断・行動することは、右のような現実観にもとづいて判断・行動するようなケースとは区別されるべきであろう。すると、この場合、信念・理想の信憑性の原因はどこに求められるべきであろうか。宗教に関しては、この問いに対する学問的解答は容易に出せない。しかし、ウェーバーが行ったように、宗教的信念が人々の行動様式ひいては社会経済構造に及ぼすパラドクシカルな作用を解明することは可能であろう。すなわち、「論理的帰結」と「心理的帰結」との間のずれに着目する分析方法が考えられるのである。

ところで、フィクションの信憑性の原因について考察する際、われわれはさらにフィクションの正統化原理としての作用にも着目する必要があるであろう。というのも、一口に信憑性のあるフィクションといってもそれは多種多様であり、とりわけ政治思想史研究で主題的に扱われるのは、政治権力・支配の正統化原理や秩序形成原理や変革原理の源となるようなフィクションであるからである。その場合、フィクションの安定性は、予測・期待と結果との整合性だけでなく、さらには人々がそのフィクションを主観的に正しいものとみなしているかどう

かと関係してくる。

以上において、フィクションの信憑性と安定性（均衡）を説明する理論を試みに提示してみたわけであるが、これに加えて、そのようなフィクションの変遷のメカニズムを説明する理論が論じられるべきかもしれない。すなわち、ある時期において支配的なフィクションが信憑性を失い、新たなフィクションが台頭するといった現象を説明するための道具立てである。もっとも、このような現象に一般的なパターンが存在するかどうかは疑わしい。現実観とフィクションとの間の均衡が何らかの理由によって失われることが変遷の必要条件となろうが、それ以上は個別的なコンテクスト毎に検討されるほかないのかもしれない。いずれにせよ、政治思想史研究を通じてフィクションの信憑性の原因や変遷のメカニズムを解明しようとする限り、われわれはそれがもっとも効果的になされるための思想史研究の方法論を構築する必要がある。

第三節　パラドックスの連鎖に焦点を当てる思想史方法論の可能性について

ここで示唆する政治思想史の方法論的展望において、ケンブリッジ・パラダイム（主としてスキナーの方法論とダンの初期の方法論）は出発点となりうる。まずは、スキナー的方法論によって、思想の非神話的な解釈、すなわちテクスト（ないし著者）の意図を可能な限り正確に再現する思想解釈が求められる。つまり、特定の思想が、どのような言語慣習・歴史的コンテクストの中で、どのような具体的な政治問題の解決に向けて、どのような発語内的力をもって創造され表明されたかかが解明されなくてはならない。これは思想の政治社会に対するイデオロギー的作用に着目することでもあるが、狭く解釈するなら、スキナーがしばしば行ったように、テクストの意図を特定の政治的事件と結びつけて理解することを意味する。このアプローチのメリットは、かなり具体的に思

想の政治的作用を捉えることができるということである。一定の思想が、どのような意図にもとづいて、どのような対象・人々に対して、どのくらいの期間、どの程度の影響を及ぼしたかがある程度明らかになるからである。

しかし、右のアプローチにはデメリットも含まれる。それは、そのアプローチの視野の狭さゆえ、思想が形成される過程における「アンビヴァレントなもの、つまりどっちにいくかわからない可能性」（丸山眞男）が軽視され、過去のある時点における多様な歴史的・思想的可能性が、「勝てば官軍」的なロジックのうちに解消されかねない危険性である（これはあくまでも「危険性」であり、スキナー的アプローチの必然的帰結でないことはいうまでもない）。つまり、歴史的事実としての政治的事件を起点としてテクストの意図を理解しようとする場合、実際には起こらなかったが起こりえた事柄が往々にして見失われるのである。

この問題を回避するためには、ダンの初期の方法論が有効となるであろう。ダンの方法論を適用した場合、イデオロギー的次元に限定されないようなミクロコスモスとしての思想世界が明らかになり、しかもその思想世界を形作るホーリスティックな意図、つまり個別的な政治的事件の次元を超えて思想家が生涯を通じて追求するような大きな目的・課題が浮き彫りになる。また、精神の軌跡を深く辿るという手法により、その思想家がどのような知的苦闘を経て現実の中で理想を実現しようとしたかがみえてくる。（概して思想とは、思想家の理想と現実観との間の不断の緊張対立関係の中から、両者の相即的な展開過程を通じて形成されるものである。）すると、その思想家の、ある時点における実際の政治的判断・行為（理論の構築という行為も含む）が、全体的構想の中でどのような位置を占めているかが理解できるだけでなく、その時点におけるカウンター・ファクチュアルな政治的判断・行為の可能性の幅もある程度推測できるようになる。

例えば、ロックの『統治二論』に含まれる発語内行為の意図を同定しようとする場合、一方で、それが王位排

斥法文書として一六七九年頃に執筆されたと解釈することも（ラスレット説）、「ライハウスの陰謀」との関連で一六八三年頃に執筆されたと解釈することも（アシュクラフト説）、あるいは執筆意図が何であれ、それが出版される時点（一六八九年）でロックは名誉革命の正当化を意図していたと解釈することもできる。しかし、他方で、ダンが『ジョン・ロックの政治思想』の中で示したように、ロックが、そのような具体的な政治的事件に還元されえない、より普遍的な政治的・哲学的・神学的課題を、生涯を通じて追究しつづけていたことも考慮されねばならない。そして、両者を関連させながら、ロックの意図を複合的に捉えることによって、ロックの思想が持ちえた意味・作用の範囲がある程度推測可能になるのである。

以上の二つの方法論（スキナーの方法論とダンの初期の方法論）を組み合わせることによって、特定の思想家が、どのようなコンテクストにおいて、どのような現実観にもとづいて、どのような思想を、どのような発語内行為として主張したか（しえたか）がある程度理解できるようになるわけだが、当然ながら、思想家の判断・予測が外れ、発語内行為が失敗に終わることはよくある。しかも、一旦思想が公にされると、それはしばしば思想家の手から離れて一人歩きする。すなわち、その思想が、曲解されたり、思想家が意図しなかったような目的のために利用されたりするのである。

したがって、次の段階では、思想家の意図とは無関係に思想がどのような歴史的運命を辿ったかを明らかにする必要がる。既に述べたように、これこそが思想史研究者にとって「もっとも畏怖すべき」ジャンルであるとダンが考えるものである。このアプローチによって、思想がどのように曲解され意味転換が行われていったか、すなわち思想の解釈と作用にまつわるアイロニーないしはパラドックスの解明が求められる。ただし、意味転換には無意識的に行われる場合（いわゆる誤解）と意図的なイデオロギー操作の結果生じる場合とがある。いずれに

せよ、思想家の立場からすればこれは「意図せざる結果」を意味する。

また、このプロセスにおいてはしばしば「神話の制度化作用」が起こり、神話的なフィクションが創出される。しかもそれはさまざまな思想のレヴェルで起こる現象なので、われわれは思想家以外の多様なアクターの現実観や考えも考察の対象としなければならない。しかも、一定の思想が個別的に曲解される場合もあれば、さまざまな思想が複合体を形成しながら変容していく場合もあるわけであるから、丸山が述べたように、扱う思想のレヴェルとタイプによって臨機応変に異なった分析視角を適用する必要がある。

このようにして、思想家の意図とその思想の歴史的運命との間のずれから生じるパラドックスに着目することにより、作為的なフィクションが神話的なフィクションへと変容するプロセス（ないしは両者が結合するプロセス）がある程度明らかになり、またそれによって、フィクションが信憑性を獲得する何らかのパタンが解明されると期待できよう。しかし、いうまでもなく、このようなパタンはコンテクストにかなりの程度拘束されるわけであるから、仮に現代にとって有用な原理を導き出せるとすれば、それは過去から現在に至るパラドックスの連鎖に着目しながら、そこにおける連続性と非連続性を統合的に捉えることによってであろう。そして、「思想論」が有意味に展開されるとすれば、それは右のようなアプローチの延長線上においてではないだろうか。

無論、以上の提案も具体性に欠けるとの批判を招くであろうが、しかし、これ以上具体的なことは、具体的な思想史研究を通じてしか知りえないのではないだろうか。私の場合、「畳の上の水練」はこの程度にして、残された方法論的課題については、実際の思想史研究を通じて検討していきたいと考えている。

（1） Dunn, *The Political Thought of John Locke* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), p. x.

（2） Dunn, 'What is living and what is dead in the political thought of John Locke?', in *Interpreting Political*

Responsibility (Cambridge: Polity Press, 1990), pp. 9-25 at p. 9.

（3） Dunn, *John Locke* (Oxford: Oxford University Press, 1984〔加藤節訳『ジョン・ロック――信仰・哲学・政治』岩波書店、一九八七年〕).

（4） 加藤節『ジョン・ロックの思想世界』東京大学出版会、一九八七年、一九九頁。さらに加藤は、非西洋世界に生きる人間が西洋政治思想史を研究することの積極的意味（オリジナリティの問題も含む）についても興味深い考えを展開している。加藤節『政治と知識人――同時代史的考察』岩波書店、一九九九年、一〇頁を参照。

（5） Dunn, *The History of Political Theory and Other Essays* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p. 2.

（6） *History of Political Theory*, pp. 1-2, 34.

（7） *History of Political Theory*, p. 3.

（8） *History of Political Theory*, p. 5.

（9） *History of Political Theory*, pp. 4-5

（10） Larry Siedentop, 'Two Liberal Traditions', in Alan Ryan (ed.), *The Idea of Freedom: Essays in Honour of Isaiah Berlin* (Oxford: Oxford University Press, 1979), pp. 153-174.

（11） *History of Political Theory*, pp. 1-2.

（12） *History of Political Theory*, p. 16.

（13） *History of Political Theory*, pp. 19-20.

（14） C.B. Macpherson, *The Political Theory of Possessive Individualism: Hobbes to Locke* (Oxford: Oxford University Press, 1962).

（15） *History of Political Theory*, pp. 24-25.

（16） *History of Political Theory*, p. 25.

（17） この点に関するダンの考えを検討したものとして次の文献を参照。Takamaro Hanzawa, 'The political

thought of John Dunn and the Cambridge School', *History of European Ideas*, vol. 19, no. 1-3 (July 1994), 179-183 at p. 183.

(18) *History of Political Theory*, p. 13.

(19) *History of Political Theory*, pp. 31-32.

(20) *History of Political Theory*, p. 22. ダンは以下の文献に言及する。R. Koselleck, trans. by K. Tribe, *Futures Past: On the Semantics of Historical Time* (Cambridge, Mass.: MIT Press, 1985); R. Koselleck. O. Brunner and W. Conze (eds), *Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialer Sprache in Deutschland*, 5 vols (to date) (Stuttgart: Klett-Cotta, 1972-).

(21) *History of Political Theory*, p. 22. ダンは以下の文献に言及する。*Alasdair MacIntyre, A Short History of Ethics* (London: Routledge and Kegan Paul, 1967); A. MacIntyre, *After Virtue: A Study in Moral Theory* (London: Duckworth, 1981); A. MacIntyre, *Whose Justice? Which Rationality?* (London: Duckworth, 1988); Charles Taylor, *Hegel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1975); C. Taylor, *Sources of the Self* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989); Bernard Williams, *Ethics and the Limits of Philosophy* (London: Fontana, 1985).

(22) Melvin Richter, *The History of Political and Social Concepts: A Critical Introduction* (Oxford: Oxford University Press, 1995).リの主張は、主として本書の'Pocock, Skinner, and *Begriffsgeschichte*'(pp. 124-142)と題する章において展開される。『概念史事典』は『歴史基礎概念・ドイツ政治社会言語歴史事典』(*Geschichtliche Grundbegriffe*)、『必携』は『フランス政治社会基礎概念必携一六八〇年～一八二〇年』(*Handbuch politisch-sozialer Grundbegriffe in Frankreich, 1680-1820*) の略記である。

(23) ダンは以下の文献に言及する。T. Ball, *Transforming Political Discourse* (Oxford: Blackwell, 1988); T. Ball, J. Farr and R. Hanson (eds), *Political Innovation and Conceptual Change* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989).

(24) *History of Political Theory*, p. 17

(25) 「ケンブリッジ・パラダイムの批判的継承に関する一考察（一）」『法学研究』第七十二巻、第十一号、第五章、第一節を参照。

(26) *History of Political Theory*, p. 15.

(27) 丸山の思想史方法論については次章で詳しく検討するが、ここではダンによる福田歓一の政治思想研究に対するコメントに注目したい。「近代の普遍的な政治諸価値（近代国家の特別な地位、人権の主張、民衆の同意と政治的正統性との関係）の際立った特徴が、その源泉となった文明のキリスト教的前提に想像力の上でどこまで依拠し続けているかを推し量ることは、日本のみならず、西洋の学者にとっても困難なことである。契約説の歴史に対するたゆまぬ関心と、近代の主要な政治的範疇――〈国家〉・〈市民権〉・〈市民社会〉――の歴史への（コゼレックの〈概念史〉の様式を思わせるような）深く思慮深い研究とを通じて得られた福田教授の理解の深さと視野の広さとには、コゼレック自身を含め、西洋の政治思想史家のいずれもが及ばないように思われる。（個人的に親しく話した経験から言うならば、たとえば彼の厳密な政治的洞察力は、クエンティン・スキナーやジョン・ポーコックなどの西洋の最も高名な学者たちを質的に遥かに超えるものだと私は確信している。）」（ダン、西崎文子・加藤節訳「驚嘆すべき人物との出会い」『福田歓一著作集第四巻・月報五』所収、二～三頁）。もちろん、ダンが福田歓一の友人であり、しかもこの文章が『福田歓一著作集』の月報に掲載されたものであるという点は考慮されるべきであるが、お世辞をいわない（それどころか、もっとも親しい研究仲間の業績でも容赦なく酷評する）ことで有名なダンがこのように述べていることは注目に値する。

(28) 丸山眞男「思想史の考え方について」『丸山眞男集第九巻』岩波書店、一九九六年、七七頁。本論文は、一九六一年に発表された後も版を重ね、若干の表現上の修正もみられるが、内容的には同一である。出版経緯に関しては、『丸山眞男集第九巻』の末尾に収録されている「解題」（四三九～四四一頁）を参照。

(29) 『忠誠と反逆――転形期日本の精神史的位相』筑摩書房、一九九二年、三九一頁。

(30) 「思想史の考え方について」七七頁。

(31) 間宮陽介『丸山眞男――日本近代における公と私』筑摩書房、一九九九年、五六～五七頁。

(32) 『丸山眞男』七六頁。
(33) 「思想史の考え方について」六九頁。
(34) 「思想史の考え方について」六九頁。次の主張も興味深い。「思想家のえがく思想というものはどこまでも過去の思想の再創造の所産であります。言いかえるならば、思想史家の抱負なり野心というものは、歴史のなかに埋没するにはあまりに傲慢であり、歴史離れをするにはあまりに謙虚なものであります。ですからそこには、一方歴史による被拘束性とともに、他方、歴史にに対して自分が働きかける――歴史に対してというのは現代に対してということでなくて、歴史的対象に対して自分が働きかけることですが――という両方向性があります。こうして歴史によって自分が拘束されることと、歴史的対象を自分が再構成することとの、いわば弁証法的な緊張を通じて過去の思想を再現する。このことが思想史の本来の課題であり、またおもしろさの源泉である、というふに私は理解しております」（同七二頁）。
(35) 「思想史の考え方について」七六～七八頁。丸山は次のような例をあげる。「たとえば民主主義的な伝統あるいは革命的な伝統を発掘する、ということになりますと、到達した結果だけから判断すればそういう思想は非常に少ないわけですね。それで結局、日本にはやっぱり民主的な伝統、あるいは革命的な伝統はなかったということになり、あるいは逆に、草の根を分けても無理にそういう傾向の思想を探し出すということになる。……またこういう考え方はしばしば直線的な進歩観と結びついているものであります」（同七六頁）。
(36) 丸山眞男「思想史の方法を模索して」『丸山眞男集第十巻』岩波書店、一九九六年、三三三頁。
(37) 「思想史の方法を模索して」三三四頁。
(38) 「思想史の方法を模索して」三二二頁。
(39) 米原謙「丸山真男――〈作為〉から〈古層〉へ」小笠原弘親・飯島昇藏編『政治思想史の方法』早稲田大学出版部、一九九〇年、一七～一八頁。
(40) 以下を参照。米原謙「丸山真男」一九頁。「思想史の方法を模索して」三三六～三三八頁。また、米原が指摘しているように、丸山は『増補版・現代政治の思想と行動』の「追記および補註」で、「超国家主義の論理と心理」で

行った分析には「お手本」がなかったと述べている。米原「丸山真男」一九頁を参照。

(41) 「思想史の考え方について」六四頁。

(42) 「思想史の考え方について」四九頁。

(43) 「思想史の考え方について」六五頁。

(44) 「思想史の考え方について」六五～六六頁。

(45) 例えば、以下の文献を参照。「歴史意識の〈古層〉」『丸山眞男集第十巻』、「日本思想史における〈古層〉の問題」『丸山眞男集第十一巻』岩波書店、一九九六年、「原型・古層・執拗低音――日本思想史方法論についての私の歩み」『丸山眞男集第十二巻』岩波書店、一九九六年、「政事の構造――政治意識の執拗低音」『丸山眞男集第十二巻』。

(46) 『増補版・現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年、三八八頁。

(47) 『増補版・現代政治の思想と行動』三八二頁。

(48) E.J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990); Ernest Gellner, *Nations and Nationalism* (Oxford: Blackwell, 1983).

(49) 亀嶋庸一「想像の共同体をめぐる想像力――戦後ナショナリズム研究への一視角」『思想』一九九六年五月号を参照。

(50) ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』ＮＴＴ出版、一九九七年、二三二頁。

(51) David Hume, 'Of the first principles of government', in Eugene F. Miller (ed.), *Essays: Moral, Political, and Literary* (Indianapolis: Liberty Classics, 1985〔小松茂夫訳「政府の第一原理について」『市民の国について（上）』岩波書店、一九五二年、所収〕), pp. 32-36, at p. 32.

(52) フランソワ・フュレ、大津真作訳『フランス革命を考える』岩波書店、一九八九年。